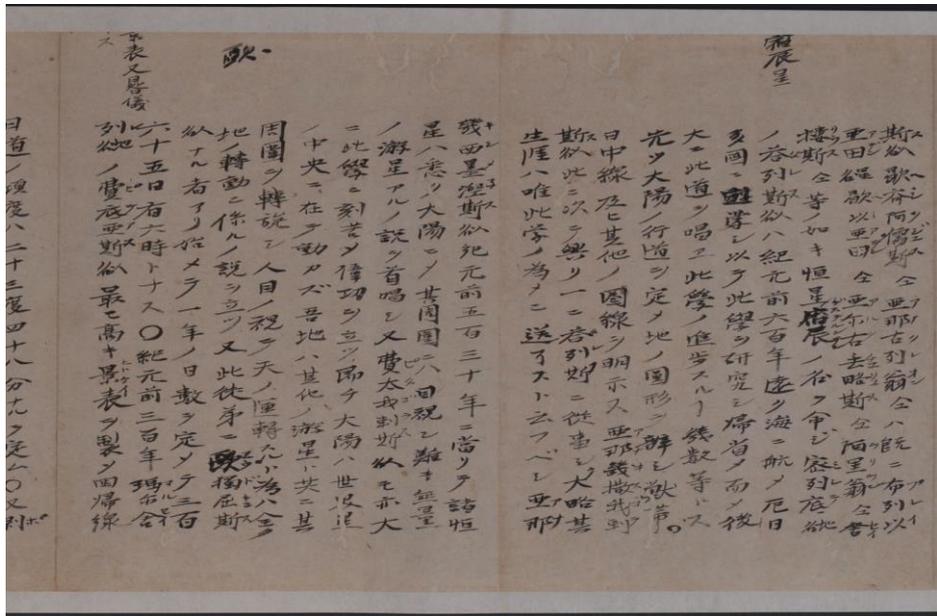
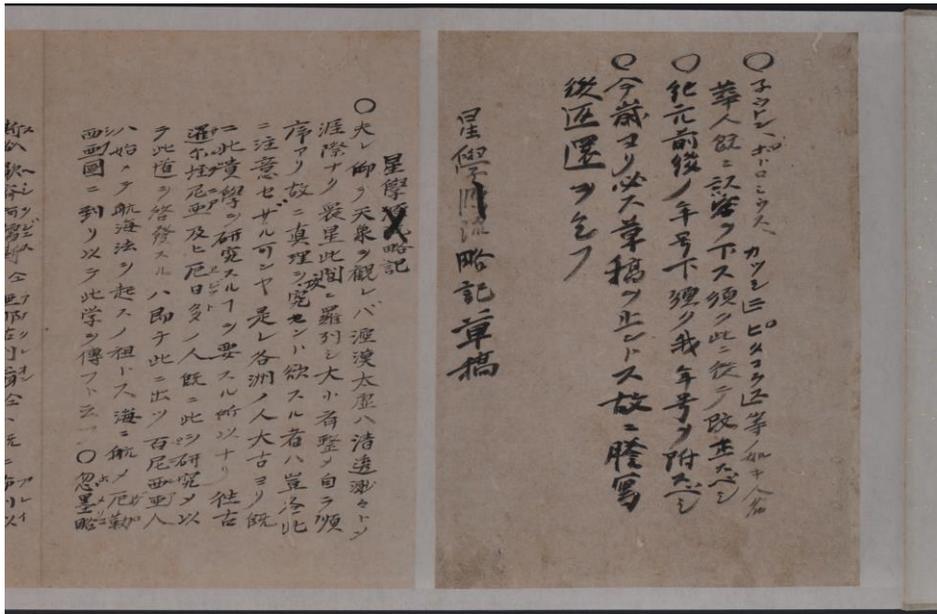


2025年6月の資料紹介



せいがくりゃつきそうこう

高野長英著 星学略記草稿（自筆原本）部分 国重要文化財

古代ローマ、ギリシャの天文学史における天文学を論じた「蘭文星学」を「星学
りゃつき
略記」と題して訳述したものです。

内容は、ピタゴラスが太陽は宇宙の中心にあって動かず、地球は他の惑星とともに太陽の周りを回っていて、人の目で天が動いているように見えるのは地球が回転しているためという地動説を立てたこと、エウドクソスが1年を365日6時間と定めたこと、エラトステネスが地球の大きさを測定したこと、ヒッパルコスが46恒星の位置

を確定したこと、そして、長期間にわたってヨーロッパにおける宇宙観を決定してきた。た^てん^どう^せつ^つの天動説を経て、コペルニクスが初めて実際の観測データから^ちど^うせ^つ地動説を唱えたこと、ケプラーが惑星^{わくせい}の楕円軌道の法則を発見したこと、ガリレオ・ガリレイが木星の4つの大きな衛星を見つけたことや太陽の黒点を発見しそれを目印にして太陽の自転周期を決定したこと、そして最後にイギリスではロンドン王立^{そうせつ}協会が、フランスでは大学校（アカデミー）が創設^{だいせいがくか}されて大星^{たいせい}学家が続いて多く出ていることなどを翻訳しています。

【参考文献】

- ・千田 捷熙『夢魂の人』（2007、ぎょうせい）
- ・須川 力『科学者 高野長英』（1990、岩手出版）